②－１「地域に学び『生きる力を育む』」

兵庫県立長田商業高等学校　教諭　村重勝也

１．はじめに



長田商業高校は夜間定時制の商業科で本科生１クラス 40 名定員の学校です。別に大人の方を対象とした情報経理専修コースが１クラスありますが、最小単位の小さな学校です。

本校は神戸市西部の長田区にあり、古い市街地の広がる地域にあります。長田区と言えばご存じのように阪神淡路大震災で非常に大きな被害を受けた地域です。都心部の人口減少が激しく、昭和の最盛期には 20 数万人あった人口が、現在では 10 万人を切る９万 9000 人に減り、同時に急速な高齢化が進んでいます。

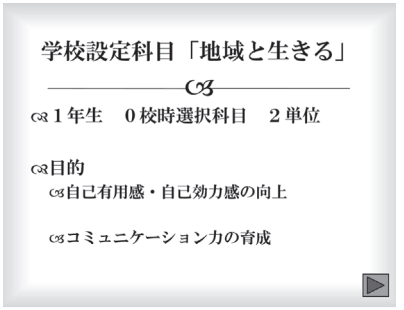
海岸付近は工業地帯であり、有名な長田のケミカルシューズの会社など中小企業が集まっています。中心から北部にかけては住宅の密集地で、高校もその中にあります。学校のすぐ近くには長田神社があります。神戸では湊川神社、生田神社と並ぶ大きな神社で、初詣には何十万人という多くの参拝者が訪れます。

この神社の参道が発展して出来たのが長田神社前商店街です。地下鉄長田駅から北に向かって、長田神社までの約 500m の間、道路の両側が商店街になっています。商店街も地震の被害を受け、昔ながらの市場も再開発のビルの中に入っています。しかし、経営者の高齢化が非常に進み、後継者が育たないということも重なって、シャッターが下りているお店がたくさんあります。



多くの課題を抱える中で、商店街は活性化委員会を設けています。長田神社の杜にいたとされるフクロウをモチーフにした「グージー」というキャラクタの制作もその一つです。グージーという名前は宮司から来ています。さらに両親や兄弟のキャラクタも誕生しました。さらに「グージー焼き」という名物を作ったりして、いろいろ頑張っていますが町の活性化はなかなか難しい地域です。

２．学校設定科目「地域と生きる」



学校設定科目「地域と生きる」は１年生の選択科目です。本校は、５時半から正規の授業が始まりますが、４時半から、いわゆる０校時というものを設定してその中で実施しています。普通定時制は４年で卒業ですが、本校は３修制も可能であり、そのためにいくつかの０校時の科目を設定しています。

定時制に通う高校生のイメージはいろいろだと思いますが、現在は中学校までにどうしても学校になじめなかった生徒たち、不登校、あるいはいじめを受けた経験のある生徒たちが半数以上を占めているのが現状です。彼らはやはり学習の遅れもあり、とにかく自分に自信がなくどうせ自分には何もできないという非常に強い劣等感を持っています。

将来の就職に向けても、まず第一に必要なのは、自分に自信を持ってもらう事だと考え、自己有用感、自己効力感というものを何とか育てていきたいと思ってます。そして、コミュニケーションに対して強い恐れを持っている生徒もいますので、できるだけ違う世代の大人たちとも交流を深める中で、コミュニケーション力を育てていくことが本校キャリア教育の第１の目標です。

３．ボランティア部による新湊川の環境改善活動

この科目の原点には 10 年以上前から本校のボランティア部が行ってきた地元の新湊川を美化する環境改善活動があります。その活動も当初は不登校の生徒たちを何とかして学校に来るようにできないかとはじめたグループ活動から発していると聞いています。川の掃除をしながら生徒と先生が一緒になって歩くことで、良い関係が生まれたといいます。



新湊川は、商店街をちょうど横切るように流れており、３面コンクリート

で固められた人工的な川です。この地域は昔から非常に水害が多かった地域で、本来は南北に流れる湊川を付け替えて東西に流したのです。神戸市は山から海までが近く、一直線に水が流れますので、ゲリラ豪雨により短時間ですごい水量になり、都賀川という川では悲惨な事故も起こりました。

そのような川なので非常に殺風景で、残念な事ですが地元の方が橋の上からペットボトルや空き缶などのゴミを捨てたり、中には自転車やタイヤなどまで放置されているような川でした。とにかくこの川のゴミを拾うことが最初の活動でした。

ところが、イタチごっこと言いますか、ゴミはいくら拾っても減りません。その頃はボランティア部としての活動に変わっていたのですが、ある部員が、「これではいくらやってもきりがない。ゴミを拾うことよりもゴミを捨てる気にならないようなきれいな川にしたらゴミも減るのではないか。」と言いました。

それで川をきれいにしよう、つまり、魚がたくさんいる、きれいな緑がある川にしようということで、新湊川のビオトープ化を始めました。最初は、川というよりは単なる水路でしたから当然魚などは住めません。そこでよどみを作るために堰を作りました。しかし、これは成功しませんでした。なぜなら、せっかく戻ってきた魚も梅雨時に卵が全部流されてしまい、魚が定着できないのでした。

そこで、次に考えたのがフトンカゴという、大きな針金のかごに土のうや大きな石を詰め込んだものを川に設置する方法です。その土のうに苗を植えて緑化します。石と石の間には隙間がありますので、ここに魚が入り込めるようにしました。そして生徒たちが苗を植えることによってずいぶん緑が増えてきました。緑は生物を増やし、川に栄養を与えます。

さらにもう一つの方法として、多孔質コンクリートで草が生えるポーラスコンクリートを川岸に塗り固めて緑化することに成功しました。こうしてボランティア部の生徒たちがさまざまに試行錯誤した結果、当初は単なる水路だった川に、緑がたくさん増えていきました。

水路といっても両側の壁が７ｍぐらいあり、のぞかないと川があるのかどうか分からないような川です。下に降りてみないときれいになったという実感がわかないという弱点があるのです。しかし、最初の状態に比べるとまるでうそのように環境がよくなり、実際に魚がたくさん戻ってきています。オイカワやカワムツなどの魚、モクズガニやテナガエビ、その他のいろいろな水生生物がやってきて、ウナギや鮎の姿も確認されています。川辺にはキショウブやショウブの苗が根付き、花の咲くころには本当にきれいな川になりました。



夏は、この川でボランティア部の生徒たちが地域の子供たちを呼び、「川あそび」と称して一緒に魚とりをすることを始めています。このボランティア部の活動を多くの生徒たちに活かしていけないかと思って生まれたのが「地域と生きる」という学校設定科目です。

この科目には大きな柱が２本あり、その一つがこの「ふるさとの川づくり」の取組です。きれいになった川を利用し、本校の生徒と地域の小学校とが交流しています。神戸市は小学校４年生の総合学習の中で環境体験学習を行っています。その学習に本校の生徒たちがコラボして、一緒に川に入って魚とりをし、生物の観察を手伝います。さらに、本校の生徒たちが川の自然環境について説明をしたり、川の危険や遊ぶルールについての講義をしています。

以前はゴミの川だったこの川をふるさとの川にするのは非常に大胆な試みだと思います。遠い道のりではありますが、昨年からは新たに七夕灯籠流しのイベントを始め、地域の人々にも一歩ずつ親しまれる川になってきたように思います。

４．地域とつながる販売実習

もう一本の柱が、地域とつながる販売実習です。長田神社前商店街は古くからある商店街ですので老舗が多いです。特に 100 年以上も続く和菓子屋さんが何軒も軒を連ねているのが特色です。それを題材として活用させていただき「長田スイーツフェア」というかたちで、ここ数年販売実習を行っています。



それぞれのお店に生徒たちが取材にいき、商品知識を得たりお店の由来を聞き学びながら商品を仕入れ、新湊川の橋の上にテントを張って、販売実習をしています。

それ以外にも、地域を盛り上げようと、主にボランティア部の生徒を中心にいろいろと頑張っています。定時制高校は夜間に学びに来ます。彼らは５

時半に来て９時半ぐらいに帰りますが、８時頃にはこの商店街はほぼ全部シャッターがおりています。登校する途中に商店街があっても、生徒と商店街の接点がないので、地元の方々にも長田商業高校定時制を知らない方もいらっしゃいます。地域の方々にもっと本校を知ってもらうために、長田神社の祭りでお手伝いをしたり、ボランティア部の有志が沖縄の民俗芸能のエイサーを練習し披露したりすることで、徐々に本校の活躍も認知されるようになりました。

５．まとめ

「地域と生きる」を設置して今年で６年目になります。成果としては、自信が持てずになんとなく高校に行けと言われるから来ていたような生徒たちの意識が、どんどんと変わっていく姿を目の当たりにしました。体験を通して自信をつけていく事が何より大事なことではないかと感じます。

一方、我々教員の側にも成果があります。こういう活動には非常に労力が必要です。私は国語の教員ですが、教科の授業よりもたくさんの時間がかかります。本来の教科の授業をしているほうがきっと楽なのだと思いますが、その分、我々自身が学ぶことも多くあり、生徒とともに関わる中で教えられることも多々あります。



これは１人のスーパーティーチャーがやる取組ではありません。本校は小さな学校なので、商業科あるいは普通科の先生方も全員が一丸となり、地域と連携する取組に参加をすることが可能です。そしてその経験は、定時制以外の学校に行っても十分力になる取組だと思います。

もちろん、課題もたくさんあります。まず、地域と定時制高校生の接点が持ちにくい事があります。なぜなら生徒たちの多くは家庭の経済状況が厳しく昼間はアルバイトをしています。しかし、この活動をするのは昼間です。夜に川に行くわけにはいきませんので、アルバイトとの調整も非常に苦労しています。どのようにして地域との触れ合いの時間を増やしていくかは難しい問題です。また地域の方々の理解や協力を得て、生徒の参加をどれだけ広げることができるのかについても非常に苦労しています。しかし、これまでの成果を考えると、この活動をさらに深めていきたいという気持ちです。

入学した当初は本当に４年間続くのかと心配していた生徒たちが、この取組を通して徐々に目標を見つけ、頑張った生徒の中には、現在この大阪商業大学に入学し教員をめざして勉強している生徒もいます。他にもいろいろなハンディを乗り越えて頑張っている生徒がいます。40 名の定員で入学してきますが２年生になると約 30 名、３年生になると 20 名になり、３年で卒業する生徒もいますが、最後４年生で卒業する生徒はわずか 10 名ほどになります。しかし、本当にその中で劇的な成長を遂げてくれる姿を見ている限り、やはりこのような取組は必要ではないかと思い、これからも改善を続けていかなければならないと考えています。